

ンを十一月二十九日朝完成させ、その夜十時頃、成田市のジョナサンへ向かい、締め切りである翌朝、午前五時四十分頃、完成。今回公募したところがダメなら他へ公募。約一年ちよいかけて公募の予定。

『流線形の軌跡』

中川 光伯

信治は酸欠になることによって、母の記憶の断片に触れることができた。それには、湿気の薄れた、夏の夕暮れに紛れて聞こえる祭囃子も一緒でなければならなかった。

校庭のトラックを三周ほど全力で走り抜けたところで下校のベルが鳴り響いても信治は止まらず、もう一回りしてからやっと息切れを感じ、そのまま芝生の上に倒れ込んだ。夕闇の迫った空が信治には霞んで見えた。朽ち果てた木造の校舎に遮られ、夕陽そのものは見えなかったが、冷たい、闇の迫った空の端へ息を吹き返すようにして鮮烈な赤を放ちながら、校庭を囲う白樺の白さと交錯し、辺りの空気を黄色く濁らせていた。

息を整えながら校舎の合間へ反響している下校のざわめきに太鼓や笛の音が混じっていることに信治は気づくと、目を閉じて尖った芝生に顔を埋めた。夜露に濡れた芝生が火照った体をゆっくり冷ましてゆき、枯れ草のような夏の残り香を思い切り吸い込んで、記憶に降り積もった埃を払った。

信治の母の記憶は、戸惑いの混じった笑みで途切れている。

「買い物に行つて来るからね、ちゃんとお留守番しているのよ」

母は信治の目線まで膝を折つてそう言くと、いつものように面の手で信治の頬を包み込んだ。信治には母に顔を寄せられる度にきゅつと息を潜める癖があった。自分の吐く息が、端正に施された母の化粧を汚すように思えてならなかった。同時に、そこから薄く漂ってくる艶めかしい女の匂いを信治はほとんど無意識に吸い込んでいたのだった。

まだあげけない信治が、こっくり頷き返すのを確認し、母は唇を噛んで扉を閉めた。それきり、母は二度と戻らなかった。

そのときの、扉の向こう側に見えていた、沈みかけた薄暮の色と遠くで鳴っていた祭囃子の音色が折り重なり、恠びしい残像となつて、信治の記憶の隅にぼつんと残されていた。それに触れることは、中学生になつた信治にはもう辛いことではなくなっていた。寧ろ

そうすることで自分を産んでくれた母を慕えるようになっていた。母親のいる他のどの生徒よりも強く母を感じる事ができたのだ。

絶え間なく耳を掠めてゆく祭囃子の音色がしだいに大きくなって信治へ迫り、記憶の隙間を埋めていった。

まだ激しく鼓動が波打っていたが、信治は虚ろな残像に浸っていた。

が、ちらつと信治の顔を斜めに水しぶきが散って、それは途切れた。信治はゆっくり体をねじって薄く目を開いた。

校庭のトラックとテニスコートの区切りに数本の白樺の木がそのまま残されており、それに並んだ水飲み場で、数人の女子が叫声をあげながら、互いに向かつて無邪気に水をかけ合っていた。蛇口から流れ落ちる水の束を、テニスラケットを振り回して切っている者もいれば、そのまま手ですくいあげ浴びせている者もいた。逃げまどっている生徒に混じって信治の副担任である高宮圭子が生徒の背後へ身を隠しながらはしゃいでいた。

圭子は、頼りなげな萎びたスーツを一年中纏っている佐藤の副担任として、信治がこちらへ転校してきたのと同時に、偶然にも同じクラスへ配属されたのだった。南から転々としてきた信治とは逆さに、圭子は北からこの東北にある学校へ配属されたのだった。佐藤に紹介されている間、信治は隣に立っている圭子をちらつとだけ見た記憶がある。佐藤の説明はたどろろしかったが、信治は納得していた。圭子は北海道で育ったらしく、信治と同じように事情の説明はなかったけれど、とにかくこの町へ住み続けることになったらしかった。信治が見つめたのは、圭子の透き通るような肌と同じくらいに引き込まれそうな澄んだ瞳であった。が、信治もそれ以上は何んの興味も抱こうとはしなかった。教室中の男子生徒が、洗練された圭子に惹かれ、見入っていたからであった。圭子は同じクラスに慣れようとしなかった信治に、気を使ってかときどき声を掛けてくれたが、信治はそれに答えることなく、よけい無愛想に目を逸らすばかりだった。

圭子は夢中になって水しぶきを避けていた。けれども、ときどきTシャツを着た圭子の胸の辺りへ降り注ぎ、うっすらと湿らせていた。周囲の生徒よりも確かにふくらとしているその胸に、信治も興味がないわけではなかった。跳ね回る圭子の胸はそれほど豊かではなかったが、滑らかに揺れ、その度に濡れそぼった下着をくつきり浮き立たせていた。執拗に圭子を狙って降り注ぐ飛沫は胸だけでなく太股にも吸いついていた。白い肌には張りついた飛沫は、それ自体が生き物のように、ときどき方向を変え、少しずつ肌に吸い込まれながら小さくなり足首の辺りで消えていった。

部室へ戻り出した同じ陸上部の生徒たちに気づかれぬよう、信治がそつと上目使いに盗み見していると、

「信治君もやっぱり同じなんだね、ほかの男子と」

腕に二本の青い線が入った体操着の裾をきちつと短パンへ入れた絵美がテニスラケットのグリップで信治の腹をつついた。それから信治の隣へ頬杖をついて寝そべった。

「そんなにきれい？ 高宮先生って」

信治は答えなかった。喉が乾いていて、滑らかに言葉を発することができそうになかった。うっかりまごついて答えたりして、曖昧な解釈でもされたら明日にはクラス中に広まっているだろう。無用な噂に関わるのでさえ、信治には面倒であった。それでもとも絵美の言葉にははつきりと嫉妬のニュアンスが含まれていた。

汗ばんだ足に張りついた芝を叩きながら信治は絵美を無視して立ち上がった。顔を持ち上げると、足のもつれた圭子がいきなり信治の腹のあたりへ肘鉄を食らわせた。圭子が反射的に繻りつき、二人は絡み合ったまま芝生の上へ倒れ込んだ。信治は息が詰まっていた。浅く息を吸い込み、整えた。慌てて圭子が向き直り謝った。

「ごめんなさい」

一瞬、圭子の揺れた髪が信治の鼻先を掠めた。圭子の顔は、ちょうど信治の目の前、数センチのところにあった。白い化粧がほとんど浮き立っていて、どこか疲れているように見える。細かく気を配るような、澄んだ黒い瞳がずっと信治の胸に溶け込み、いつのまにか、母と同じようにして息を潜め、その匂いを嗅いでいた。

それは、吹き消そうとしても決して消えようとはしない蠟燭の炎のような艶めかしい匂いであった。闇の中でただ尾を引いてぼんやりと揺らめくような、年を経た女だけが放っている疲れが滲んだ匂い。記憶の奥に閉じこめて、信治には決して触れることのできなかつた匂いが、濡れた圭子の体のそこかしこからほとばしり蒸気していたのだった。

信治はその匂いを記憶の奥まで吸い込み、蒸せかえっていたのである。

圭子は体をひねった瞬間、胸が触れたことに気づいて、半分顔を赤らめながら申し訳なさそうに聞いた。

「痛くなかった？」

信治は放心していた。それは一瞬ではあったが、絵美には分かっていた。呆然としている女子らをよそに絵美があっさり、

「痛いわけないよね、嬉しいんだよね、信治君は」

信治は表情を変えず目に力を入れ、絵美を睨んだ。それからテニス部の女子も。最後に圭子へ吐き捨てるように言って立ち上がった。

「気をつける、ガキ」

「佐々木、それが先生に対する口の聞き方か？ おい」

ふいに信治の足が軽くなった。だらりと浮かんでいた。顧問の片岡が自分の目線まで信治の襟首を掴みあげ、睨んでいた。

「あ、あの、片岡先生、いいんです。私の方が悪いんですから……」

片岡を見上げ、懇願するように圭子が言っても、信治へぐつと目を向けたまま片岡は聞き入れなかった。

「先生、そういう問題じゃありませんよ」

両手をだらりと下げたまま、信治も片岡から視線を逸らさずにつけ足した。

「私の方が悪いって、認めてるんだから離せよ、実際そのとおり……」

片岡の目がぎつと光った瞬間、信治の体は吹き飛んでいた。鈍い痛みが信治の体の中で跳ねた。地面へ叩きつけられ顎の先が擦り切れるのを感じたが、それでも片岡が放ったのは平手だったので、信治はすぐに起きあがった。

辺りを、冷めた風がすつと吹き抜けた。激しく流れ落ちる水の音を後にしながら、毅然としている片岡を静かに見やって信治は部室へ向かいだした。周囲の沈黙を気にせず、絵美が一歩前に出て、おどけて叫んだ。

「カツコつけても無駄なんだからね」

歩きながら、信治は背後の視線とは別のものを感じて、すつかり影の濃くなった校舎へ目を凝らした。ちょうど校長室の前にあった植樹の隙間にそれはあった。けれども、信治は足をとめなかった。うつかり足をとめれば、片岡らは勘違いするに違いなかった。口の中も擦り切れていたので、唾を吐き出したかったが、それも安っぽい映画のように思えて信治は飲み込んだ。片岡にはそう悟られたくはなかった。校長の息子でもある片岡は、この町の大半の土地を占める権力者でもあった。事実、この学校の土地も校長の名義のまま残されており、その処理に携わろうとする町役場の人間を躊躇わせるほどであった。もともとはこの場所も白権の木々で埋め尽くされた林であったが、これを切り開き中学校を設立したので未だ周囲には年輪を重ねた白権によって覆われていた。いずれかは、町へ寄付されるのだろうか、その際にしても片岡自身の名前が刻まれるのである。

それだけに片岡は、閑散としたこの田舎では顔も利き、人望も厚く、絵美のような快活な生徒たちにも慕われていた。それが一層彼の正義感を強め、このような憤然とした態度をとることができたのだ。少なくとも信治にはそう思えてならなかった。もちろん、このように考える信治とは違い絵美らは、いわゆる正義感が強く、愉快で勇ましい先生と解釈していたのである。

絵美の正義感も信治にとってはこれに近いものであった。信治が転校してきた当初、ルーム長である絵美は、なんとかクラスに溶け込ませようと、休み時間の度に信治の隣へ椅

子を引き、話しかけてきた。

「ねえ、どんな街から引越してきたの？ お父さんは何の仕事をしているの？ 兄弟はいるの？」いま、どこに住んでいるの？」

「転校を繰り返してきた信治にはどの質問にも答える気になれず、圭子にしたように、決まって窓の外へ視線を投げたままだった。信治が頑なに拒絶すればするほど絵美はむきになつて話しかけた。それはいつのまにか苛正しい焦りのようなものから恋愛にも似た感情へと、絵美の気づかないうちにすり替わっていた。もし誰かにそう指摘されても絵美は決して認めようとはしなかつただろう。」

「しかし、それも束の間だった。絵美が信治に惹かれているのだと自ら気づいたのはそれからすぐのことである。」

「放課後、煮え切らずにいた絵美は信治の後を意味もなく尾けていたのであった。部室へ向かおうとしていた信治は体育館の裏手まで来ると、ふと足を止めた。鈍い音が聞こえ、地面が微かに響いた。新宿から北へ向かって学校を渡ってきた信治にはそれがなんであるかをすぐに了解したが、部室へ向かうためには体育館の裏側を抜けてゆくのが最も近道だったので、信治は引き返そうとはせず、そのまま向かっていった。面倒なことに巻き込まれるのは信治も嫌ではあったが、歩こうとした道をわざわざ迂回してまで歩くことの方がもっと面倒であり、不快であった。」

「……信治君……」

「蹲って呻いていたのは行成だった。目の縁が青黒く腫れ、唇の端が切れていた。行成が立ち上がろうとすると、行成の正面を遮っていた赤井が即座に顎を蹴り上げ、体育館の壁まで突き飛ばした。吹き飛んだ行成の腹を更に数人が殴りつけ、踵で踏みにじった。人間を殴る乾いた音がしばらく続いていた。行成は低く呻き、足はときどき痙攣していた。」

「佐々木、お前もやれよ。いままでやられてきたんだろう？」

「信治が無視して去ろうとすると、行成を殴りつけていた何人かが慌てて取り囲んだ。赤井は苦笑いを浮かべながら続けた。」

「こいつがさ、自分の糞、自分で始末しねえんだよ。食えって言うてるのによ」
「思わず信治の口が緩んだ。おかしかった。だいたい今時、体育館の裏へ呼び出して糞を食わせるとは滑稽以外の何ものでもなかった。可愛いものだ。信治がこれまで見てきた光景には到底及ぶものではなかった。新宿を離れて、二つか三つ目のどこかの地方都市だった。そこでは、用意されていた氷の詰まったビニール袋へ、第二関節まで千切れた小指をいれ、なくすなよ、と渡されたものがいた。しかもそれは自分の手で千切らされたものらしかった。」

「信治がなお無視して歩き出そうすると、横にいた二人が信治の腕を掴んだ。」「調子に乗るなよ、佐々木。どこから来たか知らねえけどな、この前みてえにナイフでびびると思つたら大間違いだぞ」

「信治は担いでいたバッグを降ろした。それから後ろポケットへ手をつ込み、静かにナイフを開いた。柄に鹿の角をあしらえたカスタムナイフだ。」「よそうぜ、佐々木。俺らは別に争うことなんて……」

「そう話し続けようとした赤井の腹に向けて、どつとナイフを閃かせた。一瞬にして信治の右腕が食い込んだ。舌をだらしなく垂らした赤井がゆっくり崩れるのを支えながら信治は周囲を見渡した。誰も信治に向かってくる者はいなかった。みな、顔が白くなっていた。その様子を、行成までが凝り固まって見ていた。」「

「周囲を伺いながら信治がそつと右腕を引き抜いたのを見て、行成は気色を取り戻した。誰もがほつとしていた。ナイフには想像したような血痕は見当たらなかった。信治は突く寸前で、ナイフの柄を先端にして、ただ赤井の腹を殴ったのだった。」「

「ナイフをたたみ、信治は黙ってバッグを拾い上げると部屋へ向かって歩き出した。」「あ、ありがとう、信治君」

「行成が呂律の回らない舌でそう言った。手をつき、やつと体を起こしていた。」「老いた桜の木の陰にじつと身を潜めて、絵美はその様子を窺っていたのだった。」「

「絵美が信治に惹かれたのはこのときからである。ただし、それは同級生や先輩を好きになるという感情からはほど遠いものであった。」「

「どの学校でもそうであったが、行成にしても赤井にしても、信治にとっては同じ類のものであった。信治のようにほとんど片親で育ったのであれば、まだなんとなく理由も立ち理解もできるが、二人とも両親が健在でこれといって不憫な様子も見えなかった。」「

「けれども――信治には分かっていた。その不憫のなさが彼らにとっての不憫そのものであり、何からもそれに取って代え、満たすことが出来ないのだ。胸の奥底に吹き溜まった鬱憤を、スポーツや自慰によって吐き出すことは可能だとしても、決してその差分を満たせるだけの充足感を味わうことはできないのだ。」「

「しかし、これも信治にとっては今更という感じであった。生活がある程度潤っても人はより潤滑な潤いを求める。それは、時に富であったり、美と言ひ換えたりして、別の何かを求めるのだ。いや、確かに潤っていると思っていたものこそ、実は空虚なものであり、無意味なものなのだ。」「

「信治はこれらを母の忘れていったギリシャ神話に見いだしていた。遙か紀元前からこの敗退的な豊かさと虚無は互いに反しながらも一体となり、連綿として今に繋がっているの

だ。

それでも――信治はその虚無に意味を持たせることができた。

母の情景である。「扉がゆっくり閉ざしてゆく、その母の幻影の中に、淡いながらもきめ細かな粒子と化して、残像となり、信治の脳裏に焼きついている。」

それだけでも、赤井のような人間たちに比べれば信治はまだ満たされていたのかもしれない。

そして、圭子によって母の残像は、拡散していた粒子を紡ぎ合わせ、息を吹き返していたのだった。あの、一瞬ではあったが、むせかえるほどの艶めいた匂いが信治の鼻にこびりつき、決して剥がれることはなかったのである。

圭子の英語の授業をこれまでどおり、信治は窓の外を見やっただままり過ごしていた。彼女のときたま発する上の発音に、信治は密かに胸の奥をくすぐられていた。滑らかに捲れあがる舌使いで、それが耳元へそつと吹き込まれるような錯覚に度々信治を陥らせた。

授業が終わると、雑誌を手にした数人の女子が絵美を囲んで捲し立てていたが、絵美はそれを払って信治の隣へやってきて窓辺に寄りかかった。ゆるい光が絵美の頬を照らしていた。

「信治君にね、残念なお知らせがあるの。圭子先生ね、片岡先生とつきあってるらしいわよ。ほら、テニス部の良美、知ってる？ 知らないか、信治君は。でね、新しくできたスパーがあるじゃない？ 良美の家ってすぐ近くなんだけどさ、二人を見かけたんだって、駐車場で。いっぱい荷物抱えて車に乗り込んだみたいよ。すごく幸せそうだったってさ」白樺の枝に羽を降ろした鳥の名前を思い出せずにいた信治は、それを聞いて胸が掻きむしられていた。その言葉を無視しようとするほど痛みに近い感情が沸き上がって、なぜか胸の奥が色めき立った。胸だけでなく、穏やかな母の残像を小さな爪でひっかきまわされたようでもあったが、しかし、どこかその痛みを噛みしめ、味わってもいたのである。

信治の反応を楽しみながら絵美は、澄み渡った秋の空を見上げて、言った。

「そのあと、どこに行ったんだろううね」

信治はその日の部活で、下校のベルが鳴り終えてかなり経っても、走ることを止めなかった。片岡が再三忠告をしてもトラックまでやって来たが、それでも信治は走り続けていた。絵美の言葉に、色めき立った自分が信じられず、それを認めたくもなかったからである。

すつかり人氣が無くなり、辺りも静まり返ったころ、ようやく信治の足がもつれて、そ

のまま白線の引かれたトラックへ倒れた。右足を擦り、血が滲んでいた。

もう陽は沈んでいた。ちょうど白樺の林の上に月がただしんと浮かんでいる。立ちこめていた靄が青白い光に染められていて、信治をどこか別の遠い場所へ引き込んだような錯覚に落としたほどであった。

転がってじっとしていると絵美の言葉がふと思ひ出され、信治はそれを振り払うようにして立ち上がった。

視界の隅にあつた白樺の林が一瞬ざっと揺れた。ざわめいた。それから人の口を押さえつけるような押し殺した声が、薄い靄に沿って、信治のところまで伝わってきた。が、信治はそれも無視した。立ち上がって腕についた土を払っていると、助けて、と掠れた声が校庭に響きわたった。

その声は間違いなく圭子であった。信治は猛然と闇へ向けて走り出した。

信治が近づくと急に辺りは静まり返った。再び沈黙が落ちていた。しだいに目が慣れてきて、信治は白樺の闇の中を見据えた。佇びしく光る白い木肌を縫うようにして薄い靄が立ちこめ、積み重なった落葉を湿らせていた。

信治の右手の方で、かちっと小枝が折れた。信治はとっさにそれを開うようにして左へ流れ、しゃがんだ。それから息をぐつとこらえ、再び目を凝らした。が、ただ闇がそこにあるだけで音一つ聞こえてはこなかった。信治が思い直して気を緩めたその一瞬、背後からナイフがすつと伸びてきた。信治はそれを交わそうとぎゅつと右手で掴んだ。手のひらにきりりと痛みが走り、よろめいた。足がもつれた。音の去った方で、距離を保っている濃い陰の肩が上下に激しく揺れ、信治を見つめていた。が、すぐに本々を縫って闇へ紛れ、消えていった。

信治は圭子を探した。

暗闇で圭子は呆然としたまま樹へ寄りかかっていた。目の焦点を失い、信治が声をかけても一向に気づく気配はなかった。Tシャツが引き剥がされ、白い胸元が青白く光っている。

信治は肩を揺さぶり、頬を軽く叩いた。圭子がやっと闇から視線を剥がすと、信治を見て、わっと泣き出した。まるで迷子のように泣きじゃくった。

その声がひとしきり林の中へ響きわたると、圭子は自分が教師であることを思い出したように信治へ聞いた。まだ呼吸が乱れていた。

「だ、だいじょうぶ？ 信治君。け、怪我は？」

「俺よりも自分の心配しろよ。ほら」

信治は着ていたジャージを圭子へ放り投げた。圭子が慌てて袖を通しながら、

「け、警察、呼びましょう。それから、救急車も」
「闇に染まって、赤黒ぐなつていゝ信治の手のひらを握りしめそう言うとき、信治は笑った。
「先生、甘いよ。この程度のことじゃ、下手な噂になって町中に広まるだけだ。町の端まで
知れ渡る頃には先生はやられたことになってる。しかも、俺と一緒に、よけいに怪しい。
それに…」
信治はそこで言葉を噤んだ。それに…片岡が知ったら心配するより嫉妬心が勝るだろう？
圭子は冷静な信治の判断を呑んだ。圭子もこんな片田舎で、同じような他人からの干渉を受けているに違いなかった。信治は辺りをもう一度見回しながら、
「だいたい、こんな遅くまで何していたんだ？」
「女子の部屋、片していたの」
信治は思わず鼻で笑った。
「そんなの絵美たちにやらせればいいだろう？」
「で、でも、みんな疲れていて…」
信治が立ち上がって、圭子へ手を差し出すと、再び顔を曇らせ、涙ぐんだ。
「で、でも、どうして私なの？」
そんな圭子を見てか、信治が思わず口走った。
「先生が…きれい過ぎるんだ…」
圭子はすっと顔を上げて、やがて顔を赤らめた。薄暗い中でもはっきり信治にはそれがわかった。が、そんな場合ではないことに気づくと圭子は、
「とりあえず、その手をなんとかしないと…」
また躊躇った後、つけ足した。
「わたしの、部屋に…」
大した怪我ではなかったが信治はそれを断ろうとはしなかった。
圭子は信治を部屋へ招くと、傷口を台所で洗い流した。それから信治をベッドへ腰掛けさせ、救急箱から包帯と塗り薬らしいものを取り出し、テーブルへ撒いた。
信治は痛みも忘れて、部屋を見渡した。淡いブルーで色調がまとめられていた。カーテンにテーブル、それから机にテレビまでが群青色であった。
机の上に写真立てが飾られ、中には、片岡と肩を組んで微笑んでいる圭子の写真があった。信治はそれから目をそらし、圭子が丁寧に包帯を巻く横顔をしばらく見つめてから、再び写真へ目を戻した。片岡のひしゃげた笑いが、信治の胸だけでなく指先から爪先まで

急激に冷やしていった。片岡の陽に焼けた笑顔がいつそう信治を不快にさせていった。巻かれた包帯の中で痛みがきりつと走り抜けた。

「はい、できたわ。ありがとうね、しんじく。」

圭子がそう笑顔で話しかけたとき、信治はもう床へ圭子を押し倒していた。

圭子はまた呆然としていた。けれども、あの闇の中で見た恐れのようなものは滲んでいなかった。明るいせいいか、圭子は落ち着いているように信治には見えた。圭子はゆっくりと手を差し出し、それから信治の頬を包み込んだ。信治の記憶が一瞬母を呼び覚ました。圭子はそれから、目を逸らして、閉じ、しばらく考え込んでいるようだった。

部屋に響く秒針が信治の高鳴る鼓動とは別にゆっくり聞こえていた。圭子は信治をじつと見入って、言った。

「……明かりを、明かりを消して……」

信治は首を横へ振った。

灯りを消すことを信治は許さなかった。信治の頭の中をふっと素朴な疑問が過ぎった。

「……なぜ、拒まない？ 片岡がいるだろう？」

圭子は答えなかった。頬をすつと赤く染め、視線を壁へ投げた。信治もその答えが必要でもなかった。にも関わらず、なぜ、自分がそんなことを聞いたのだろうかと考え、その答えに行き当たり、止めた。答えを単純な欲望へと信治はすり替えたのだった。

寝ていた圭子をベッドへ担ぎ、放った。圭子は慌てて座り直し、信治を、今更ではあつたがきつと睨みつけ、壁まで退いた。信治が、圭子に着せていた自分のジャージをむやみに剥ぎ、それからすでに破れたTシャツに手を掛け、止めた。

圭子は固く目を閉じていた。肩で息をしている。信治はTシャツをそのままに、そっと手を置いた。柔らかい感触と波打つ鼓動が伝わり、圭子の恥じらいに重なって信治の胸を貫いた。自分の呼吸も乱れてゆくのが信治にもはっきりわかった。膝を立て、全身を強張らせている圭子の全身も赤く染まりはじめていた。その反応を信治は弄んだ。信治の手の平の強弱によって、圭子がしだいに染まってゆくのを。信治は片岡の写真を眺めながら、更に圭子の胸を激しく揉みしだいた。

信治は視線を落とした。圭子の股間へ視線を注ぎ、手を離した。うっとり目を開いた圭子は、目の前にいる信治をまるで遠い層気楼でも眺めるかのように見つめていた。圭子は信治の視線にはっと気づくと反射的に膝頭を閉じた。けれども、信治はそれを許さなかった。

圭子の視線をじつと見据えたまま信治は膝へ手をかけ、言った。

「下も、脱ぐんだ」

慌てて圭子は首を振った。もう手遅れではあるが、まだ間に合うのだ。が、信治の欲望はすでに抑えきれないほど、渦巻いていた。信治の、より冷めた視線が圭子に注がれていた。年端のいかない少年を自分が汚しているのだという意識が聖職たる圭子の認識をくすぐりよけいに紅潮させ、陶酔にも似た恍惚をもたらし、胸の奥の隅を疼かせていた。そこへ、薄い亀裂が差し込むと圭子は崩れていった。

陶酔しきった圭子は、そつと足をベッドから投げ、下着を落とした。

艶めいた匂いが瞬時に信治の胸の奥へ浸み入った。

信治の体が強張った。

信治の脳裏で、母の残像の粒子が瞬時に集束し、眩いばかりの光を放った。音もなく拡散してゆく光の輪の中に、すつと落ちてゆく流れ星のような軌跡を信治は見た。それは流線形の軌跡を描きながら、再び訪れた静寂と闇の中へ沈み、飲み込まれ、消えていった。

安心して信治に気づいて、圭子は再度、躊躇った。赤く頬を染めたまま頑なに拒んでいると、我に返った信治はそれを断ち切るようにして膝頭を掴み、力まかせに押し広げた。その行為は信治にとって唯一、同じ年頃の少年がするような衝動だった。

白い幹の隙間からはもうとっくに樹液が溢れだしていた。シートにまで小さな染みが薄く広がっていた。両手で顔を覆い隠し、肩を震わせている圭子とは別に、白く濁った樹液は、艶やかな光沢を放ち、自らの意志を持ってその淵を彩っていた。

信治の内で、突然、被虐的なものが膨れ上がって疼いた。圭子の小刻みに吐く息と止めどなく滴る樹液から異様な匂いを嗅ぎ取り、信治は胸の底を熱くさせていた。幼い少女のように体を強ばらせる圭子の内から、もう二人の圭子が、ゆつくりと、絶え間なく、静かに産み出されているように思えてならなかった。それがいつそう信治の体を火照らせ、彼もまた気づかぬうちに濡れていたのだった。

彼はそれを指先にすくい取った。ふいに触れた圭子はびくと跳ね上がったが、閉じようとはしなかった。

信治はその匂いにむせかえりながら、顔を埋め、自分のものをぐっと握りしめた。

圭子の荒くなつてゆく息づかいが、樹液にまみれた信治には優しく響いていた。信治は圭子に交わることなく、そのまま果てたのであった。

平坦に続ける佐藤の授業中、隣の席の女子につつかれ、信治は紙切れを受け取った。開くと絵美からで、

『帰り、一緒に帰ろう：裏の校門で待ってるから：来てくれるまでずっと待ってるか

ら：』

身勝手な内容で、信治が辟易しながら、ちょうど反対側の窓際に座っている絵美に目を向けると、いつになく沈んだ視線を投げかけていた。人づてにこんな手紙よこして、自分と噂になってもいいのか、そう思いながら、信治は絵美から視線を剥がしたが、絵美は周りの目も気にせず、いつまでも信治を見つめていた。

昼休みに、図書館へ向かおうとしていた信治と、職員室の前でばったり圭子が出くわした。圭子は片岡と一緒にであった。ジャージを捲り上げた腕で頭を掻きながら片岡が大袈裟に笑い、圭子もそれに答えるように微笑んでいた。信治には華やいで見えた。しかし、圭子は信治に気づくとすっと視線を落とし、やがて頬を染めた。無骨な片岡はそれでも話し続け、一人で笑っていた。その様子に信治の胸の奥が再び疼いた。

「先生、今日、部活休ませてください」

振り向いた片岡は、教師の顔を取り戻していた。

「佐々木か、どうした？ 具合でも悪いのか？」

「いえ、絵美が明日からいなくなるでしょう？ 俺に話があるんだって」

「そうか。おまえらそういう関係だったのか？ こいつ」

片岡は自分のことのように照れながら、信治の頭を羽交い締めにした。

ポケットへ手をつ突っ込んだまま信治は左右に揺さぶられて、圭子の反応をじっと見ていた。

圭子の目尻が一瞬悲しげに揺れて、それを取り繕うように笑い出したのが、信治には掛け替えのないものに思えてならなかった。

絵美は、手編みの真っ赤なマフラーをゆるく首に巻き、蕨の絡まった門へ身を預け、じっと待っていた。

西日が強く、風は乾いていた。信治たちを見て何人かがひそひそ話しながら通り過ぎたが、絵美は気にせず信治に近寄った。

「：よかった： 来てくれて：」

絵美の顔が安堵に満ちて緩むと、すぐ俯いた。それから、すっと顔を上げた。

「転校するの： あたし： しかもさ、もう明日からなの。すぐ近くの町なんだけどね：いきなり過ぎない？ 私、夕べはじめてお父さんと喧嘩しちゃった： だってそうでしょう？：」

信治はバッグを担ぎ直した。理由は聞かなかった。聞く必要もなかったから。

信治が初めて転校した際も、やはり父の理由からであった。信治の父は霞ヶ関にある大手の商社へ勤めていた。信治は幼いながらもテレビで父の会社の宣伝が放映されているのを見て、それなりの感慨を持っていた。父は勤勉に仕事をこなし、部下に慕われ、同僚の誰よりも早く課長という地位を得、確実に出世の道を歩んでいた。しかし、それも母が去るまでのことであった。父は母が去ると世間体を気にしだした。会社では、部下や上役の目が冷ややかなものになり、近所の視線もそれと同様であった。しだいに父は苛立ち、つまらないことでも信治へ当たり散らした。

信治は子供心にも思った。父には実は何も無いのだと。それに最も早く気づいたのは、母なのではなかったか、と。

小学校へ通っていた信治のタイミングなど考えず、突然、学期末を待たずして、信治は転校させられたのであった。一度踏み外した道を父は修正できずに、職を転々と変え、やっと現在の長距離トラックの運転手という仕事に落ち着き、ここ数年でも信治がこれほど長く同じ学校にいられたのは初めてのことであった。

だから、なんとなくではあるが絵美の憤りがわかった。そして、信治は決してそれを知ろうとはしなかった。

「信治君、お願いがあるの…聞いてくれる？」

絵美がじっと見つめた。目の端にうっすらと涙が溜まっていた。

「…聞くだけで、いいのか？」

絵美はすかさず笑って返した。

「屁理屈だけは達者なんだから」

そう言って俯き、また悲しげな視線を信治へ投げて、ゆっくりつけ足した。

「家まで送ってほしいの：」

か細い水路が、すっかり傾いた陽に向かって吸い込まれていた。その両岸を迫り出したすすきが覆い、辺りには色を失った田んぼが、霞んだ山の縁まで敷き詰められ、乾いた静けさを孕んでいた。信治には見慣れない光景で、いくらか間延びした印象を与えていたが、嫌いではなかった。

絵美がそこに伸びた細い畦道を先に歩いた。信治の足の裏側に土の柔らかい感触が伝わってくる。

ときおり吹き抜ける風に、すすきの穂先がたおやかに踊っている。信治が黙ったままでいると絵美も沈黙していた。が、ふいに立ち止まって振り返った。その拍子に巻いていた赤いマフラーの先がはらっと伸び、絵美の胸の辺りへ落ちた。

「もうひとつ、お願いがあるの：」

信治が訝しそうに首を傾げると、ゆっくり絵美は近づき、いきなり信治の胸を突き飛ばした。

よるめいた信治はすすきをなぎ倒しながら滑り落ちてゆき、やっと草の根を掴んだ。すかさず絵美が駆け下りてきて、信治の腹へ馬乗りになった。

「どういうつもりだ？」

「ごめんなさい：」でも、こうするぐらいしか思いつかなかったの：私の、願いを叶えて：「お願い：」どうか、そのまま、じっとしていて：「

絵美はほとんど泣きそうだった。顔を曇らせたまま、ぎゅっと目を閉じた。唇を細かく震わせながら、絵美はゆっくり顔を寄せてきた。距離が縮まり、信治の頬の辺りへ微かな息づかいと匂いを落とした。それは母のような全身を包み込むようなものでもなく、鮮烈な圭子のようなものでもなかった。未だ昇り切れない甘酸っぱさを残した匂いであった。しかし、それでも信治は、絵美の内へ母のような郷愁に満ちたその匂いの欠片を感じたのであった。

すっと圭子の手が頭を掠めた。が、信治は絵美を拒まなかった。

まだ固い唇だった。風がざわめき、浅い夕暮れの中に絵美の髪がそよいだ。朽ちた草葉の匂いが地面を伝って二人まで届き、やわらかに包み込んだ。絶え間ないせせらぎが、絵美には優しく囁いているように思えた。

重ねた唇から、小刻みに震える絵美が信治に伝わってくる。

信治は絵美の髪へ静かに指を滑らせ、そのまま離さなかった。

翌日、絵美はクラスへ何も告げず、学校を去っていった。

しばらくして、絵美から信治のもとに手紙が届いた。中学生らしいピンクの封筒だった。

「信治君、元気？」

「あ、元気かどうかなんて聞くまでもないね。どうせ返事しないんだから。

私は元気です。

圭子先生は元気かな？ ううん、答えなくていいよ：

こちらに来て、はじめて信治君の気持ちが変わりました。

私、しつこかったね。信治君にいつぱい尋ねちゃったね：

ごめんね：

でも、今だからかもしれないけど、転校してきた信治君を、初めて見たときからずっと好きだったんじゃないかなって：

だってそうでしょう？ あんなにしつこかったんだもの： きっとそのときからだったんだ： 私が好きになったのは：

ねえ、信治君、もしさ、もしだよ。信治君がずっとその町にいて私もこの町にいたら、一度だけ、もう一度だけでいいから会ってくれる？

いいでしょう？ そのぐらい：

ちよっと大きだね。手紙だからかな。逢おうと思えばいつでも逢えるのに： でも、信治君とはそういう約束しておかないと、ずっと逢えないような気もするの：

そうだ。お願いだけじゃなくって、お礼も言わなきゃ。

願いを、叶えてくれてありがとう：

わたし、きっと忘れないよ。私が、いつか忙しない大人になっても：

あのとときの草や風の香りも、信治君の息づかいも、それから私の胸の高鳴りも： たぶん、ずっと忘れてはいけない、大切なものなんだと思うの： だから、信治君にお願いがあります： わたしのこと、わたしのことを忘れないでほしいの：

最近、よくお母さんと話します。お母さんが言うには、もっとも哀想な女は忘れ去られた女なんだって：

私はいやです。だから、どうか忘れないでください：

あの風景の中のわたしを、ずっと：

ps: 捨てるならちゃんと言いでからにしてよねー

emi |

信治は同封されていた写真を眺めた。

見慣れない制服を着た絵美が公園のベンチに座って微笑んでいる写真だった。

信治にはわかった。その奥には隠しきれない陰が揺れていた。絵美の、ベンチへついた指先が白くなっている。それはぎゅつと何かをこらえているものに違いなかった。

信治は手紙を丁寧に折り畳み、写真と一緒に母の残していった本の隙間へ挟んだ。

翌日、信治は部活には出ず、いったんアパートまで戻って荷物を部屋へ放り出し、机の上の小銭を握りしめ、絵美の町へ向かう電車へ乗り込んだ。

絵美の町も、信治のそれと同じように黄色く濁っていた。

閑散と静まり返り、色の削がれたバス停とロータリーにはただ枯れ葉が舞っているだけであった。

駅前降り立った信治はまず耳を澄ました。それから、歩き出した。どの町でもそうであったように、駅前には必ずと言っていいほど、その大きさに関わらずゲームセンターがあった。微かな機械音を聞き分けながら信治は歩き出した。

プリクラに収まろうと争っている集団は写真の絵美と同じ制服であった。やはり新宿と同じように、短めのスカートで、髪も茶色に染められ、だらしなく喋っているのが信治にも聞こえてきた。

両替機で意味もなく小銭へ替えながら、信治は、その中に一際目を引く女に注意した。信治の知る限りの学校では、一人として美しい女が中心に置かれたことはなかった。必ず、一人だけが鮮烈な美しさを放ち、すべてに於いて統治していたのである。

美しい女は校内を乱す者だけでなく、他の生真面目な生徒ばかりか、多くの教師たちの注意も逸らし、惹きつけていた。人を魅了し、惑わせ、そして最も残酷でもあった。それは幼ければ幼いほど残酷なものなのである。彼女らは、美という妖しい光を普段は胸の奥にそっとしまい込み、必要に応じて甘い光を放つのであった。

その女はプリクラの機械の脇で待っていた、髪も黒く膝丈ほどのスカートを履いた、田舎ではどこにでもいる普通の女子中学生を呼びつけ、軽く頬を叩いた。女子中学生はひきつった笑顔へ変わり、逃げるようにして走り去った。

信治は女を尾けた。女のグループからひとりまたひとりと雑踏へ消えてゆくのを見届けていた。

信治はさり気なく周囲を確認し、女が一人になったところを見計らって、いきなり腕を掴んで薄暗い路地へと引きずり込んだ。女には抵抗する余裕などなかった。女が叫ぶ前に信治はまず女の顔を、がっつとブロック塀へ押しつけてねじ伏せた。左腕を瞬時に背骨の中心あたりまでぐつとねじりあげ、もう一度ブロック塀へ叩きつけた。女が軽く呻いた。通りの方へ目を配りながら信治は、髪が解れた女の耳元へ囁いた。

「手をつけ」

女が信治を振り払おうともがくと、信治は更に腕をねじり上げた。また、くつと呻いたがそれでも女は信治の言うことを聞こうとはせず、背後の信治を蹴り上げようと必死に足

を突き出していた。白く細い足だった。仕方なく、信治はぐいっと女の手首を直角にひねった。鈍い感触が伝わり、女はぶるっと体を震わせ、黙った。

「信治はもう一度言った。」

「手をつけ」

残された右手を、女が、触れてはいけないものに触れるような、たどたどしい手つきでブロック塀へ差し出した。

血色の失った白い指の隙間、人差し指と中指の間めがけ、信治は力を振り絞ってナイフの刃を突き立てた。ブロック塀のカスが飛び散り、ちょうど中指の根元をかすめ、刃が食い込んだ。女が車に轢かれた蛙のように啼いた。嘔き出した汗で茶髪の毛先が不自然に頬へへばりついている。それでも女は口を開き、信治へ言った。

「だ、誰に頼まれたの？ ねえ、教えてよ」

「まだ女は口元に笑みを浮かべ、信治の顔を見ようと首をひねった。」

「わ、わかったわ： 雪江？ 雪江じゃないの？ そう、美保ね、美保でしょう？ あいつ、金あるからね： いくら貰ったの？」

女の口からは絵美の名前は出なかった。が、信治が見当違いしたのではなく、女が絵美をその程度にしか見ていないからであった。

信治がそう確証を得たのは、女の妖しい美しさに他ならなかった。けれども、目の前の女からはあのむせ返るほどの匂いを何も感じるものがなかった。母や圭子や絵美らが放った匂いの断片を一片たりとも持ち合わせてはいなかった。それがいつそう信治を苛立たせ刺激していた。

「信治は突き刺さったナイフの柄を握り直した。」

「いいか、これからこの刃を倒す」

「ま、待って：いくら貰ったか知らないけど、倍払うわ、お願い：」

信治には聞こえなかった。信治は柄をゆっくり引きはじめた。女の口元に浮かんでいた笑みがふっと消えた。が、それも一瞬でしかなかった。代わりにもっと濃い薄笑いを浮かべて、言った。

「：ただで済むと思ってるの？」

ありきたりの捨て科白に信治は幻滅した。答えようかどうか、ちよっと迷ったが、口を開いた。

「それはさ、中指と薬指と小指が地面へ転がってから考えるよ」

「信治がそう言って静かに刃を寝かせてゆくと、女は震えながら目を逸らした。そこで信治は手を止め、さっきよりも低い声で言った。」

「目を逸らすな。見るんだ。逸らすと手が丸くなるぞ」

女の目尻に始めて恐怖が滲んだ。刃は、まず中指に吸い込まれていった。薄いチークがすっと切れるようにしてそれは口を開いた。そして、固いものに当たったところで信治は手を止めた。女が尿を漏らしていた。信治は手を据えたまま、足をどけると、再びぐっと力を入れ直し、引き、そのまま中指を削ぎ落とした。あっさり落ちた中指は尿の中で奇妙な形で躍っていた。同時に、女はその場へ躊躇り、声にならない声をやつと振り絞って、泣いた。信治には女の甲高い泣き声が鈴虫の羽音に思えた。

ききききききり：ききききききり：

女の髪を鷲掴みし、顔を引き上げた。涎を垂らしている女の目は充血し、朦朧としていた。が、信治はしつかり目線を合わせ、それから言った。

「痛みなんて、一瞬なんだろう？」

そのまま尿の溜まったアスファルトへ叩きつけた。女は全身を震わせ、ほとんど気絶しかけていた。

ナイフについた血痕を女の制服で拭くと、信治は周囲を確認しながら、ほんの少し忙しなくなった大通りまで走り抜けた。

大通りに出てから信治は人並みに沿ってゆつくり歩いた。当分の間は、激痛で声も上げられないだろう、そう思いながら信治は時計を気にした。

信治には、指一本分ぐらいの時間があれば、この場所から逃げ切れる自信があった。

絵美がいなくなって数日も経つと、教室には、より斜になって窓から光りが降り注ぎ、冷めた視線が絡み合っていた。

教室の隅では、相変わらず、赤井のグループが行成をこずき、からかって楽しんでいた。もし絵美が居ればすぐに片岡を呼び、平手の二三発ぐらいは喰らっていたことだろう。

信治は机の中から、昨日届いた絵美の手紙を取り出し、教室を離れた。図書館へ続く人気のない廊下で封を開けた。真新しいジャージを着た絵美が数人のクラスメイトと体育館でじゃれあっている写真だった。信治は手紙を読まずに写真と一緒に丁寧に千切り、そのまま廊下のゴミ箱へ放り込んだ。

廊下の窓が一枚の絵画のように見えた。信治の教室の窓はアルミサッシに替えられていたが、図書館へ通じる廊下の窓は未だ木製のままで、棧はところどころ黒くくすんでいた。

秋の陽が真っ直ぐに白樺の木々を縫って差し込んでいた。光の帯は薄い陰影を作り、信

治にはちよつとしたオーロラのように見えていた。

廊下の方から足音が聞こえて、信治はそちらへ視線を移した。圭子であった。圭子は、信治に気づくと一瞬歩を緩めたが、そのまま整然と信治の脇を通り過ぎ、図書館へ消えていった。

信治は窓の外へ目を戻した。じつと陽に打たれながらその景色を眺めていた。

その夜、いつまでたっても信治は寝つかなかつた。胸の奥が、ざわついていた。

絵美の幸せ： 幸せというには、多少信治に大きさに思えたけれども、少なからず、平穩に過ごせるよう願っていたはずであった。が、信治の心に、妙な風が吹き抜けていた。

すすきに埋もれて抱き合つた光景が遙か遠い過去のように思えた。あのとき、絵美が信治に焼きつけた情景はいまやひどく色褪せたものにしかなり得なくなつていた。

信治は隣の部屋で寝ている父に気づかれぬよう、そつと足を忍ばせ、アパートを抜け出した。圭子のアパートへ向け、夢中になつて駆け出していた。

夜道を走っている間に妙な寂しさが増していった。これまで何も必要としていなかったはずの自分が必要とされることによつて、何かに気づき、しかもそれを猛烈に欲していることに信治は気づいた。けれども、何を欲しているのか自分でもよく解らず、解ろうとすると胸を掻きむしられような想いとなつて喉の奥からこみ上げてきた。

信治にはまだ、それが切なさであることがよく分からなかつた。

圭子の部屋にはまだ明かりが残されていた。信治が救われるような思いで、扉を叩こうとしたとき、アパートの前に置かれた車に気づいた。

片岡の四駆だつた。信治は足を忍ばせ、アパートの表へ回り、カーテンの隙間から中の様子を覗きこんだ。

その光景を見て、信治は夜の底へ突き落とされた。淡い照明の中、ベッドへ腰掛け、天井を仰いでいる片岡の股間を圭子の頭が激しく上下していた。信治はすでに感覚というものを失つていた。そこに今自分が立っていることすら、不思議なものになつていた。夢であつて欲しい、信治は初めてそう願つた。

しかし――それだけでは終わらなかつた。骨の突き出た片岡の手で頭を押さえつけられている圭子が信治としっかり視線を合わせたのである。圭子は瞳が潤んでいるのを隠そうとはしなかつた。寧ろ、それを信治へ見せつけているようであつた。

いつか――信治が、圭子の前で転校する絵美に会うことを何気に仄めかしたとき、圭子の瞳は一瞬悲しみに揺れていた。あれは、悲しみではなかつたのだろうか……今、信治と

絡み合っている視線は間違いなく、光さえ失った闇の底へ墜ち、どつぷり浸っている女そのものではないのだろうか：

信治は雨が降りはじめたことにも気づかず、その場にずっと立ち竦んでいた。

「信治君、いい情報、仕入れたよ。圭子先生、来年片岡と結婚するんだって」

放課後、誰にも気づかれぬよう信治の机へ近づき、行成が楽しそうに耳元で囁いた。

「圭子先生ってさ、きれいだもんね。垢抜けていてさ。なんでこんな田舎に来たんだろうね、ほんと不思議だよ。でもさ、悔しいけど片岡とお似合いだよ。そう思わない？」信治君

胸が空になっていた信治に、怒りが一気にこみ上げてきた。圭子の結婚話に驚くと言うよりも、なぜ行成がわざわざ自分にそう教え、気安く圭子のことを話すのかが。信治を苛ただせるにこれ以上十分なものはなかった。

信治がざっと行成の襟首を掴みあげた。そのまま行成の体を引きずるようにして、後ろの黒板へ叩きつけた。行成の首を自分の頭上までずりあげると、白い、白墨の煙が舞う中で苦しそうに行成は足をばたつかせ、もがいていた。必死に信治の手を剥がそうとしていたが離れなかった。

しばらく信治は苦しそうな行成を見ていたが、しんと教室が静まり返っていることに気づいた。

信治の体からすっと力が抜け落ち、手を離れた。行成が腰から崩れ落ちると、信治はバックを手にして教室を後にした。

信治がふらっと駅前まで来ると、雑踏の中に時計を気にしている圭子を見つけた。

圭子は白いビニール袋を下げ、寂れた商店街の通りへ曲がり、急かされるようにして消えていった。

いつのまにか、信治は走っていた。走りながら、ふと自分がおかしかった。なぜ、自分が走り出したのか： 走っているのか： 走って一体どうしたいのか： 追いついたところで何がそこにあるのか：

信治はそれらを振り払った。自分はどこにかく圭子と話がしたいのだ。彼女に会って、そう、笑顔でなくともいいから、傍にいて欲しかった。ずっとじゃなくてもいい： いま、いまだけでも、ほんの数分だけでもいいから、彼女のすぐ傍にいたかった：

横道から飛び出してきた自転車避けながら、商店街の角を抜けて、信治は立ち止まった。真っ直ぐに続く通りには圭子の姿は無かった。それなりに忙しなく行き交う人の合間

を縫いながら、信治はときどき跳ねて左右に並ぶ店内を次々と覗いていた。通りの端まで行き着いてから、もう一度振り返った。圭子の姿はどこにも見あたらなかった。

「会えないと思うとよけいに熱いものがこみ上げてきた。胸の奥が激しく掻きむしられた。信治は後を振り返らず、圭子のアパートへ向けて再び走り出した。

「アパートの駐車場の隅で、街灯に照ちされながら信治は待っていた。まだ息が荒かった。圭子の部屋には明かりがなく、人の気配もなかった。

「バックを放り出して信治が息を整えながらふと顔を上げると、薄暗い中にぼんやりと、荷物を抱えた圭子がこちらを見つめて立ち竦んでいた。

「信治は、とぎれとぎれになりながらも言った。

「先生、ほんの、少しでいい。ほんの少しでいいから一緒にいてくれないか？」

「圭子はそれを聞いて一瞬身を強張らせた。がさがさっと荷物を持ち直して、ふっと力を緩め、しばらく考え込んでいた。圭子はやっと口を開いて信治へ言った。

「：荷物、置いてくる。部屋の中はだめだけど、：」

「圭子は辺りを見回して、

「そこに神社があるでしょう？　そこで待ってて。すぐに行くから：」

「境内には明かりなどひとつもなく、ただしんとした闇がそこにあるだけであった。信治は銀杏の葉を踏みしめながら枯れた賽銭箱の隣に腰掛け、夜空を見るときも上を見上げた。

「プラスチックのような月が白い光を放ち、その輪郭を蒼く染めていた。それから星が点々と散っていることに気づいて、しばらく考え込んだ。最後に夜空を見上げたのはいつだろうか。信治が思い出せずに焦っていると、信治の視界にすっと白い足が浮かび上がった。

「圭子がゆっくり近づいてきていた。隣に腰掛けた圭子は、すっと両腕を前へ突き出して軽い伸びをし、無理矢理笑顔を作った。

「どうしたの？　信治君。：なんか、変だよ」

「くすつと信治を笑い、立ち上がった。返事もせず、項垂れたまま信治が頭を抱え込んでいると、圭子は真顔になって、信治の前へしゃがみ込んだ。信治はその気配に向かって咳いた。

「：この前は、ごめん：」

「圭子はそれを聞いてほっとし、答えた。

「別にいいの、とは絶対に言えないし、許せないけど：」

信治は、けど、と言われて顔あげた。圭子がすつと顔を寄せてきた。

「… 信治君、教えて欲しいの。どうしてそんな風になったの？」

「どうして？ 信治は耳を疑った。それから、耳の奥で何度もその言葉が響いた。振り払って信治は言った。

「どうして、そんな風っていうのは、どういう意味なんだ？」

圭子が怯えた。けれども、圭子はほんの少しだけ教師であることを滲ませて、はつきり言った。

「口を閉ざす、っていうか… 人を頑なに寄せつけないって言うか… になにか、心ま

で閉ざしてるように思えるの…」

「口？ 心？ 先生、誰だつてさ、誰だつてそうだろう？ みんな確かに明るく元気に喋ってる、でもそれは違う、喋ってるように本当は誰も喋っていないんだ、本当のことを誰もしゃべろうとはしていないんだ…」

そう言い返しても圭子の言葉が信治の胸に刺さっていた。信治はその痛みを押し殺しながら、やがて耐えきれず、いつのまにかすつと涙がこぼれ落ちていた。

しだいに視界が歪み、目の前に立っている圭子が遠くにいるように思えた。急に寒さが凍みできて、足が震えていた。信治はまるで子供のように泣きじゃくっていた。

ふつと信治の頬が暖かくなった。厚手の白いセーターを着た圭子の腹に抱き寄せられていた。それから耳を澄ませた。セーターの向こう側から、圭子の少し乱れた呼吸が信治の鼓膜まで届き、揺らしていた。

信治をそつと離して膝を折り、圭子は信治へ顔を合わせた。

「いま、信治君は… いまは本当のことを喋ったの？」

信治の息が詰まった。目を開いた。信治の目の前で圭子が微笑んでいた。それを見つけて信治はまた泣きだした。とめどなく涙が頬をつたい落ち、信治には堪えきれなかった。

顔を信治から離すと、圭子は信治の頬を両手で包みこみ、親指で涙を拭った。涙は薄く広がってすぐに乾いた。

「信治君、わたしは信治君が思い描くような女じゃないのよ…」

圭子はそう言うってから目を閉じ、信治の濡れた唇へ重ね合わせた。圭子の唇は絵美のよりも甘くて、やわらかいものだった。

けれども、圭子のそれが愛ではないことを信治にはよくわかっていて。わかっているだけに信治には決して手に届かないものに思え、それがよけいに胸を貫き、再び涙が頬をつたい落ちた。それは信治にとって切なさに違いなかった。

甘く、切ない余韻に浸りながら信治が薄く目を開いた瞬間、ぐらつと視界が揺れた。横

腹へ熱いものが走った。信治の様子に気づいた圭子が不思議そうに顔を離した。それから、ひっと軽い悲鳴を上げて、信治から後ずさった。月光の中、学生服の左ポケット脇の横腹へナイフが半分ほど垂直に立ち、鈍く光っていた。信治がそれを引き抜こうとして身をひねった瞬間、ずるつとナイフが消え、信治は倒れた。ナイフが消えた方向へ目を向けると、目尻をひきつらせた行成が濃い陰になって笑っていた。

「し、信治君、だめだよ、先生はさ、先生は僕のものなんだ。先生がクラスへ来たときからずっと僕のものだったんだよ。僕はさ、先生をずっといつでもどこでも見守っていたんだから」

「一気に捲し立てた行成の唾液が、すつと膈へ落ちた。信治の体中から嫌な汗が吹き出し、脇の下を濡らしていた。信治は圭子を見た。呆然としていたが、圭子の気持ちは立ち上がろうとしていた。何度か腰を浮かせようとしているが、足に全く力が入らないようだった。行成がじりりと右足を前へ出した。

「だいたい、信治君は気づいちゃいけなかったんだよ。ほら、覚えているかい？ きみさ、部活が終わったとき、先生にぶつかって片岡ともめたことがあつたらう？」僕はさ、植木の中からじっと先生を見ていたんだ。だって好きな人だから、好きな人を守るのは僕の義務じゃないか？ あのと、先生にぶつかってきみは変わったんだ。気づいたんだ。よけいなことに気づかなくていいんだよ、信治君」

「その間に信治は背後のポケットへ手を回し、片手でナイフの刃を起こした。

「信治君、だめだめ。ぼくはよく本を読んだよ。きみが僕を助けてくれた日からだけだね。そこに書いてあつたよ。相手の背後に近づこうとするときは、その意識を捨てなまやだめだって。意識を周囲に溶け込まなまや、こつちがやられるってさ」

「ゆ、行成君。落ち着いて…：…いまなら、いまなら間に合うわ」

「行成が薄く笑った。神社を囲む銀杏が一瞬ざわめいた。

「落ち着いて？ 先生、先生もよく本を読まなまやだめだよ。もつと読まなまやだめだよ。うん。相手を落ち着かせるときは、その言葉は禁句だって、そう書いてあつたよ」

「地面へついていた信治の手にどろつとしたものが触れた。それから信治は抑えていた脇腹がかなり深いことに気づいた。目を見張っていた圭子も地面が濡れていることに気づいた。風がすつと吹いても銀杏の葉がへばりついたままだった。

「そうだ、先生。その本、今度、一緒に読もうよ、そうだ、そうしよう。その方がいいに決まってる」

「行成君、お願いだから… 早く、信治君を病院に…」

「いいんだよ、先生、いいのいいの、信治君は」

「あさつり言った行成に思わず圭子は怒鳴った。

「死んじゃうわ！ほんとに死んじゃうわよ！」

「行成の目が急激に闇へ吸い込まれたように、信治には見えた。

「うるさいっ！雌豚！おまえは雌豚だっ！全部ぼくは知ってるんだっ！」

そう叫んでから行成がしゅんと口を閉ざし、また開いた。

「先生は、感じていたんだ。…信治君、信治君もいつだったか、夜中に先生のアパートへ来たろう？で、覗いたろう？あのとき、僕もいたんだ。驚いたろう？信じられなかっただろう？信治君はさ、初めてだったかもしれないけど、僕はずつと側にいたんだ、先生を守らなきゃいけないからね。だから、ぼくはずつとずつと見ていたんだ。片岡はさ、ほら脳味噌が筋肉だからさ、気づかなかつたけど、先生は僕に気づいていたんだ。はじめのうちは僕もばれてないだろうと思っていたんだけど、違ったんだ。何度か、僕と目があったんだ。視線が間違ひなくあったんだ。それから、甘い目で僕に見せつけていた。…僕が毎晩いることも知っていたし、片岡が来ても来なくてもずつと細くカーテンを開けて、僕に見せていたんだ…」

信治はますます力が抜けていたが、全身の力を振り絞ってよろめきながらも立ち上がった。それから圭子をちらっと見やった。圭子は壊れた人形のように首を横へ振っていた。

「ゆ、行成、わかった。わかったから、もうやめよう、俺をやってもつまらないぞ」

「つまらない？何言ってるんだい？信治君。今、僕にとつて最も邪魔なのはきみだよ。きみはさ、どうしてそうやって僕を邪魔するんだ？いつだったか、白樺の中でも僕の邪魔をしたろう？ねえ、お願いだよ、お願いだから死んでくれ」

行成が濁ったナイフを閃かせた。向かってくる行成の手を正面から受け止め、両腕を押さえた。そのまま腹で受けた瞬間、ちらっと胃の辺りまで熱くなつた。が、行成の両腕を押さえ込んで、そのまま地面へ押し倒そうと信治は行成の右足を払った。行成が倒れ、信治はすかさずその腹へ膝を落とした。行成の口からごぼると白っぽいものが吹き出て、月明かりに青白く煌めいた。

行成のナイフを握った右腕のつけ根を、脇腹の痛みを耐えながら信治はやつと体を起こし、左膝で押さえ込んだ。それからすかさずナイフを閃かせ、行成の頬へ当てた。口が粘つきながらも信治は行成へ言い聞かせた。

「やめる、行成。よすんだ。まだ、間に合う。俺が言ってるんだから信じろ、そうだろう？先生」

圭子は、もうこちらを見ていなかった。ただの人形だった。信治が行成へ目を戻した瞬間、信治の喉の奥からごぼつと熱いものが吹き出し、行成の顔面へごぼれ落ちた。その中

で行成がけたけた笑っていた。

「信治君、戦闘中は神経を集中させなきゃ、だめだよ、うん」

信治は右脇腹を見た。行成の左手がぐつと何かを持ってそこにあった。

行成はもう一度強く差し込み、引き抜く瞬間、手首を返した。信治の体がぐらつと揺れ、口から更に熱いものが吹き出しこぼれた。行成がもう一方の左手でナイフを閃かせていた。行成が甲高い声で笑い続ける中、信治は倒れる瞬間、行成の喉元へさつとナイフを滑らせた。

行成の笑いがふいに消え、かわりに、掠れた息の音が信治の耳へ届いた。

信治が倒れ、行成は片手で喉元を押さえつけながら、必死に何かを言おうとしていた。けれども、必死に押さえつけているその指先からすべての言葉がこぼれ落ちていた。

なんとか体を起こした行成の目が教室で見たそれに戻っていた。行成が薄く笑いかけた。信治も一瞬躊躇ったがすぐに笑い返した。行成はばたつと背中から倒れ、喉元から手が離れた。

行成へ声をかけようとしても、やはり信治も言葉が出てこず、かわりに、さつきよりもますます濃くなった固まりがこみ上げてきて、辺りへまき散らした。

信治はそのまま夜空を仰いだ。

空気が澄み、星がはつきり信治の目には映っていた。手が届きそうなほどであった。深い闇へ点在している星々は互いに距離を保ち、どれひとつとして同じ色はなく、ときどき瞬いていた。

酸素がしだいに薄れてゆく中、信治はそれを、だから美しいんだ、そう思っていた。誰かがすつと信治の脇へしゃがんだ。もちろん、圭子であった。ほとんど放心したまま圭子は信治をのぞき込み、その匂いを落とした。

それから、信治の耳の奥から祭囃子の音色が響いてきた。母の光景が今までにないほど鮮明な光を放って脳裏へ蘇ってきた。信治は圭子へ向けて微かに唇を動かした。それに答えるようにして圭子が薄く笑いかけた。それから、言った。

「邪魔だったのよね、二人とも…」

もう信治には何も聞こえてはいなかった。ただ、信治は圭子がすぐ傍にいてくれて、自分に微笑んでいることに感謝していた。

「…でもね、信治君。…最後のキスは慰めじゃなかったのよ、わかってね…」

信治の目は見開かれたまま、母の残像を映していた。

母が閉じようとした、追憶の扉へ信治の小さな手がすつと伸びていた。

終